音楽と自分に誠実である事の難しさ

若松君が大学時代から長い間Jazzに携わってきて、今こうして君の演奏をCD化するにあたり時の経過の早さと同時に、若松君の音楽に対する姿勢が醸造されたんだなという感がしている。
とはいってもあくまでこのCDは自分の一つの通過点であり、完全に醸造された訳ではないことも知らなくてはならない。
今の時代資料は豊富に存在し、何が音楽の真実なのかも混沌とした時代になってきている中で君の音と選曲を見ていて何かほっとする感じすらしている。勿論音質について様々な角度からアドバイスする事が有るが、タイムについてはとても良いものを感じるしシャープでタイトなリズム感はJazzでは当然のこととしても、演奏の内容に十分な安定感を与えている。
非常に幅広い選曲がとても良いし、Jazzを普段聞かない人にも違和感なく接することが出来るのもこのアルバムを好感をもって聞くことが出来る。
過剰な背伸びをすることなく難解さを強調するでもなく自然な流れの中でプレイができているのでは?
そしてその選曲もセンスのひとつでしょう。
そして曲のフェークを考えている点が何より注目出来ることである。
こういった有名なスタンダードのフェークは何よりも難しくそこに着目して自分なりの解釈を加えている点も興味深い。
細かいアドバイスはまたの機会にまわそう。
メロディーを吹くのは何より難しくそれを曖昧にして演奏しているプレーヤーはいくらも目につく。
My　Romanceのメロディーとリハモナイズのアイディアは非常に良いが、さぞやVocalist泣かせの音程だったと思う。
バラードについてはメロディーの音の連結が曖昧で有る点は少々残念だし、こう吹きたいという意志が少々希薄に感じるがこれは自分だけでは解決出来ない点である事も知って欲しい。
音作りは正に音楽そのものであり、音楽の良心で有ると言っても過言でないでしょう。それがなかなか出来ないのが現実で慣れから来る無責任さを露呈しない様、どれだけ自分を客観視出来るかをこれからの課題として続けていって下さい。
何をプラスしてゆけば新たな自分を作り出す事が出来るかを考えの中心に置いて頑張ってください。

フルート奏者　宮田英夫